

こどもとあそび

佐々木 正美（精神科医）

■はじめに

私は、児童期・青年期の精神医学を専攻している医師でございますが、私自身3人の男の子どもをもっている父親でもございまして、高校生が2人、中学生が1人ございます。親としては育児の峠に差しかかったなあという感じがしないでもありません。

毎日、精神保健の面で不幸な状況にある子どもたちにたくさん会いながら、自分の子どもをどう育てようかというようなことを試行錯誤してまいりましたが、毎日のクリニックで会い、悩んでいる子どもたちから学んだ私なりのいろいろなアイデアを、きょうは「こどもとあそび」というテーマに結び付けて皆さんにご紹介し、皆さんのお仕事のご参考に供したいと思っています。

ただいまH先生からも、子どもとうまく遊べないお母さんがいらっしゃるというお話がございました。そのように思います。私は、神奈川県を中心に十何か所の市町村に出かけ、毎週夜、保母さんとの勉強会に伺っております。そういう勉強会を通じてみますと、確かにお母さんと上手に遊べてもらえていない子どもに直面いたします。保母さんがいろいろな意味で非常に悩んでいらっしゃるケースにたくさん出会うわけです。

■自分のことが聞いてもらえない

子どもたちはどのように育てられると遊べるのでしょうか。子どもにとってあそびというのは、大人にとってのあそびとおよそ違うわけでございます。大人から見たあそびというのは、たいへんマイナスのイメージが強くありまして、勉強とあそびというように対比されたり、働くということ

と、あそびということが対比されたりするわけです。ですから、遊んでばかりいるとってしかられる子どもがいますが、勉強ばかりしているとってしかられる子はいないわけです。あるいは、よく働く人というのは、非常にすばらしい人といわれますが、あそび人というと、非常にイメージが悪い。遊ぶという言葉に、私たち大人はしばしばマイナスのイメージをもってありますが、レジャーとかレクリエーションという言葉に置き換えてみるとわかりますように、まったく様相が違っていると私は思っております。

ところで、私自身は昭和 10 年生まれで、もう過去の人間なんですが、私どもが子どものころには、大人が子どもにあそびを奨励する必要が何もなくあったんですね。子どもは上手に遊べたものですから、あそびの意義などといって、このように取り上げて皆さんとお話し合いをするなどという必要はなかったのでございます。あそびはちょうど、十分な緑と美しい空気や水というようなものでございまして、それは、私どもの子どもころには、あり余っておりましたから、そのことの大切さを語る人はありませんでした。

豊かな自然が大切であるということ、私たちは子どものころにいわれたことはありません。美しい空気や清らかな水がいかに大切かということも、だれもいっていませんでした。これらは、あたりまえに存在していたのですから。同時に子どもも、大人たちが子どもにとってあそびはこのように大切なことです、というようなことを、積極的に説く必要がないほど、上手に自然に遊んでおりました。むしろ、遊びすぎるために、遊ぶなということをお母さんからいわれていくらいでした。

ところが美しい水も、美しい空気も、十分な自然も不足してまいりますと、そういうものの大切さがにわかにクローズアップされてきたように、上手に遊べない子どもが増えてきてまして、ちょうど子どもにとってのあそびということの意義が、水や空気のように、大切な意味を持ってきたというふうに思っています。

上手に遊べない子ども、あるいは上手に遊べない親子というものは、実際にはどういうことなのか、どういうところから来るのかということ、私のごく卑近な経験のなかから、ちょっとご紹介してみます。

まず、上手に遊べない子どもというのは、保育園の子どもなどを見ておりました、自分のいうことをよく聞いてもらえるという育児がされていな

いということです。自分のことをよく聞いてもらう、自分の話をよく聞いてもらう、自分の要求、自分の願望をたくさん聞き届けられる以前に、大人たちから、「こうなさい」、「ああしなさい」、「こういうことはいけません、ああいうことはいけません」ということをいわれすぎて育っている子ども、というふうに基本的には見えることが多いんですね。

いわれすぎている、と申しましたが、大人たちが子どもに向かっていうことは、間違っただけはめったにいわないんです。大人たちは、一つひとつは正しいことをいっているのです。「おしっこはトイレでしましょう」、「手づかみでご飯を食べてはいけません」、「友達をたたいてはいけません」、「夜は早く寝なさい」、「テレビは長く見てはいけません」、どれも一つずつは正しいんですが、その量といわれ方ということを考えますと、結果としては正しくなくなってしまう、ということがあります。

子どもたちは、自分の要求や願望をたくさん聞き届けられながら、いろいろしつけをされ指導されるというときに、非常に納得してうまく育っていくのです。保育園や幼稚園などに伺って、先生たちが非常にお困りになっている子どもたちに会いますと、あそびはもちろん上手にできないわけです。弱い子どもを突き倒してしまう、先生にまわりついてばかりいる、「ねえ先生、ねえ先生」というようなことばかりいっている。先生が忙しくて十分にその子のほうを振り返ってあげられないと、どうしても先生が振り返らざるをえないようなことをする。小さい子を押し倒す、バケツの水をひっくり返す、給食のおかずをひっくり返す、ガラスを割る、といろいろなことをします。要するに、こうすれば先生はこちらを振り返らざるをえない、ということの結果としてやるわけです。

「アテンション、アスキング・ビヘイビア」すなわちアテンション・プリーズ、こちらを向いてください、というわけです。注意獲得行動などという固い言葉もありますが、その子は、先生の関心を絶対的に買う切り札として、そういう行動をするわけですね。

こういう子どもを保育園の現場では非常に困っていらっしゃるということがあります。要するに、まず、子どもが自分の願い・要求をたくさん聞き届けられていないという状況があります。



■大人も語り合わない

ところが保育園で、そういう子どもたちのことをどう保育していったらよいか、ということを探ねられた場合、私たちは、そういう子どもたちのご家庭のこと、ご両親のこと、いろいろ聞きうる範囲内で聞くわけです。われわれのところへおいでになる同様なタイプの子どものご両親とお話ししてもわかることですが、そういう場合には、しばしば親自身が自分の思いをたくさん聞いてもらえる友人や近隣、家族や親戚の人とかをもっていないことがあります。私たち大人は、子どものいうことをゆっくり聞いて育児をしよう、教育ということは子どものいうことに十分に耳を傾けるところからスタートする、大人はそういうことができるはずだ、などというふうに思っていますが、どうも、そうではないようです。人のいうことをゆっくり受け入れられるという人は、これは母親でも父親でも保育者でも教育者でも医師でも、相手のいうことをゆっくり聞き入れるためには、自分のことをゆっくり受け入れてくれる友人とか知人とか先輩とか同僚とか家族とかをもつことが必要なようです。

きょうは保育者の方がたいへん大勢お見えだと伺ってまいりましたが、保母さんが子どものいうことをゆっくり聞いて育児をする、保育をする、ということができるようになるためには、お母さんが日常生活でそうでなければならぬのと同じように、保母さん自身が自分のことをゆっくり聞いてくれる友人、同僚、先輩というものをもたないと、どうもうまくいかないようです。教師も、また、おそらく医師も同じでしょう。

■触れあい恐怖症と孤独

ところが現代は、私たちが人とゆっくりコミュニケーションする、ゆっくり気持ちを通じ合わせて共感しあいながら話をするという時間とか相手とかをもちにくい時代になっているのだらうと思います。私どもの同僚であり、先輩である方に、東京大学の精神科の医師で山田和夫先生という高名な先生がいらっしゃいます。山田先生は東大で学生の精神保健の相談

にのっていらっしゃるのですが、その先生が2か月くらい前でしたか、朝日新聞にある文章を寄せておられます。それを読みますと、現代の東大生は一種の触れあい恐怖症にあるということです。触れあい恐怖という言葉を使って表現されていらっしゃいましたが、これは現代の大学生たちが、通り一遍の表面的な人間関係しかできないため、仲間同士あるいは教官たちと深い人間関係がもてず、友情や人間関係が深まりそうになると、不安を感じて逃げてしまう。しかし、そういう自分に非常に不安感をもっている。こういう学生が多くなっているということです。こういう学生のことを「触れあい恐怖症」というように呼んでいらっしゃいますが、相談に来る学生たちに非常に多いということです。別にこれは、東京大学の学生に限ったことではないのです。

いろいろ調べた人のお話を伺いますと、大学の周辺から麻雀荘がどんどん消えているそうです。麻雀といいますのは、4人の気心が知れた親しい友人が集まらないとできないゲームで、パチンコとはそこが訳が違うわけです。一人で楽しめるゲーム、あるいは深い人間関係を必要としないで、しかも大勢の中にいられるゲームというものを求めて、そういうところへ人びとが集まるようになりました。ディスコクラブなどもそうです。お互いはそんなに親しい人間関係があるわけではございませんが、そこにいるとホッと心が安らぐ。

プロ野球のファンクラブなどもそうです。私はおもに横浜で仕事をしておりますので、登校拒否など孤独な若者たちに横浜大洋ホエールズのファンクラブなどを勧めることがございます。まったくの他人が隣り合わせても、あの応援団のコーナーの一角に座るだけで、周りにいる人が非常に親しい人に思えてくるのです。横浜大洋ホエールズを勝たせようと応援するわけですが、勝ったからといって何になるわけでもないんです。お父さんが大洋漁業に勤めているわけでもないし、親戚の人が横浜大洋ホエールズの選手をしているわけでもない。だけど、あそこに行って大洋ホエールズをとにかく応援しよう、なぜ自分が大洋ホエールズを勝たそうとしているのかわからない。とにかく、そこにいるだけで、お互い、広沢虎造の浪曲の「森の石松」ではございませんが、飲みねえ、食いねえ、という雰囲気になるのだそうです。ところが、試合がはねてしまうと、またシラッとなくなって元の木阿弥になってしまう。なかには、そのなかで友情や恋愛が生

じることがあるそうですが、本来は深い人間関係がもてないところで、なんとなく人恋しくて集まってくるというような雰囲気です。現代はそういうふうになりつつあるわけです。

■相互依存

そういう現代の状況のなかで子どもがお母さんに育てられている、というところから話が始まるわけでございます。

一般的に申しますと、私どもが日常見る子どもの多くは、非常に孤独なお母さん方に育てられているということです。核家族化といいますけれども、私は、単純に核家族がそんなにどんどん増えているというふうには思わないんです。なぜかと申しますと、昔、きょうだいがたくさんいた時代には、長男の家庭だけが三世代、つまり祖父母のいる家庭でしたが、両親が何組もいるきょうだいはないのでありまして、次男、三男の家はすでに核家族なんです。けれども実家や、きょうだい、あるいは近隣と親しくしていたものですから、孤立した家庭ではなかったんですね。ですから、核家族化だから問題であるというふうにと考えると、これは誤りが生じると思います。いずれにしても、現代は、子どもたちが豊かな人間関係を持つ親に育てられないわけでございます。

私たち大人は、自分のことをたくさん聞いてもらえる友人、ということは同時に相手のいうこともよく聞くわけですが、共感的なコミュニケーションを日常的に習慣的に豊富にもたない状態で育児にたずさわろうとしますと、どうしても、自分の思いを子どもに伝えるという傾向が強くなるようです。子どもの思いをたくさん受け止める、聞こうということ以前に、こちらの希望とか、こちらの願いとか、こちらの気持ちを子どもにたくさん伝えてしまう。そういう育児をするわけです。これは保育者でも教育者でも皆同じだと思います。

私はよく保育園に行って、保母さんに「一匹狼はいけませんよ、同僚と親しくされることが必要ですよ」ということを申し上げます。はぐれ鳥や一匹狼では決してよい保育はできません。どんなに一生懸命になっても、また、一生懸命になればなるほど、自分の思いを子どもに伝える指示や命

令の言葉ばかりになってしまっという傾向を人間はもっているようです。

いろいろ豊かな人間関係をもちながら、ということは、自分の思いをたくさん日常的に仲間に聞いてもらい、相手のいうこともたくさん聞くという相互依存の関係のなかで育児をしますと、依存的に相手を受け入れることができる、相手の依存体験を十分に満たしてあげることができる。親子のあそびというのは、ほんとうは、そういうところから始まるわけです。あそびというのは、しつけというような発想とはおよそ違うわけでありまして、子どもの願い、子どものいうことをよく聞いてあげられるということから始まるわけです。子どもの好みに合わせてあげることが基本的にあるということです。

ですから、親と子で親子あそびというのができるわけです。「お母さんはお母さんの役割をします」、「私は私の、僕は僕の役割をする」といって、日常的でないお母さん、日常的でない自分を演じて、親子あそびができるわけです。動物になったり、怪獣になったり、そのほかいろんなものになったりすることができるわけです。あそびというのは、日常生活の場面とは違うわけです。そうしたときには、お母さんは子どもの身になり、子どもが望むお母さんに変身して遊んであげる。現実場面では、必ずしも全部子どもの望むお母さんになれないかもしれない。そういう切り替えとか、ゆとりというものが、現代のお母さんには、なかなかできにくいようになっているようです。

別に、これはお母さんだけではなくて、多くの人が、人と豊かなコミュニケーションをすることができにくいという傾向を深めているようです。

そこで私たちが子どもを育てるときには、まず私たち自身がいろいろ多くの人と豊かな人間関係をもちながら育児にかかわらなくてはいけない、というふうに思います。そういうことの延長線上で、子どもは友達とほんとうに遊べるようになってくるんだろうと思うのですね。



■大人社会と虚構、そしてルール

あそびというのは、子どもが単に、やりたいことをやりたいようにやっているということとは違うわけです。生活の中で単純に優位性を示すものが子どものあそびではなくて、子どもが成長・発達していくためにやらなくてはならない生活の主導的な形態だというふうに定義をする人がおります。私もそうだろうと思います。成熟や発達をしていくために、どうしても必要で、実行しなくてはならない生活の主導的な形態、これがあそびだろうと思います。

あそびというのを一口で申しますと、子どもが創造的に虚構の世界をつくるということです。つまり、その内容は、想像的なイメージ、現実の場面から切り離されたものであり、だから非常に創造的な営みであるわけです。その想像はイメージとしての想像もありますし、クリエーションとしての創造も含まれる。そういう基本的な営みだろうと思います。

そういう意味では、あそびは、子どもたちが創造性を発揮するためにきわめて大事なことなんですが、虚構の世界をみんなで作くりながら、あそびの世界を構成するためには、一定のルールが必要になってきます。この現実から切り離れた虚構の世界であるということと、しかもルールをつくって守りあうということ、この二つがあそびにとっては非常に大事なことで私は思っています。

例えば、お母さんと親子あそびをするとき、お母さんはお母さんという役割を、暗黙のあるいは一定のルールのなかで精いっぱいやる。子どもは「私は私」としての役割をやる。なかには、とても豊かな想像性を発揮して、お母さんと小さい子どもの立場を逆にして遊ぶお母さんもいますね。子どもがお母さん役をやって、お母さんが子ども役をやるというふうなあそびも、あそびとしてはできるわけです。そのときには、お母さん役はお母さんらしく振る舞い、子ども役は子どもらしく振る舞うというルールがあります。現実からはひどく遊離しているようで、実際は現実の日常生活で体験や見聞したことを総合的に模倣したり、自分なりに解釈してやっているのです。突拍子もない新たな虚構の世界に突き進んで遊ぶわけではな

くて、子どもの眼から見た大人の社会、あるいは大人の社会生活を想像的にそして創造的にやってみようとしているのです。

子ども同士のあそびでも、もちろんそうです。あそびというのはいつも虚構場面です。しかしその虚構場面が、ほとんど常に大人の生活や生き方を模しているということに、私たちは改めて注目しなければならないと思います。その虚構性、抽象性、象徴性というのを、年齢とともに子どもはどんどん発展的に創造していきます。例えば、棒切れを持って、それを馬にたとえる、棒を股の間に挟んで、お馬さんごっこや競馬ごっこをする、というようなことも、やろうと思えばできますし、ここはお城なんだ、というように特定することもできるし、だれは殿様であり、だれは家来だということもできるし、電車ごっこをしようとするときには、綱の輪が電車であるという一定の設定をする。だれが運転手さんで、だれが車掌さんで、だれがお客さんであるという役割の分担をする。そういうなかで、それぞれの役割にあるルールを守り合って遊ぶわけです。もっと本格的にルールということになりますと、例えばサッカーをしようとする。ボールを手で触っていいのはゴールキーパーだけであるというルールをつくる。例えば、かけっこをする。用意ドンといわれたら走る、どこまで走るかというルールを決める。

こういうふうに、子どもたちは一定の虚構場面をつくり、一定のルールをつくって遊ぶわけですが、こういうことに、どれだけ大きな意味があるのかということです。あそびというのは、単純に好きなことを好きなようにやっているように見えますが、子どもたちは、ほんとうは、いつも、いちばん楽しいことを単純にやっているとは限らないんです。非常に苦勞をして目的を達しようとしていることもあるわけです。陣取りゲームをする、かけっこをする、何かをするというときには、自分の肉体的能力の限界を使い、知的にも非常に努力をしているんですね。ある意味では苦勞をして、みんなで決めたルールの中で、ある目的を、達しようとしているわけです。

この場合に、ある決められた条件の中で一定のルールを守りながら、何かをするということ、これはどういう意味があるのかと申しますと、これこそ人間的な成熟にかけがえのないことを、実に自然に訓練していることのように思います。社会人になるための練習そのものだと思うのです。単に快樂にふける行為では決してないですね。そういう眼でもって、改めて

子どもの遊びを見てみますと、あそびといえますのは、直接の衝動をコントロールするという習慣を身につけるために、とても大事な行為なんです。かけっこをしようとするときに、ヨーイといわれたときに、みんなより先に駆け出したいけれど、それを堪えて、ドンの合図で走ろうとする。サッカーでは、ボールを手でつかみたいけれども、それを我慢して、足や体や頭で止めようとする。ですから、できればこうやりたいんだけども、ルールに縛られて我慢する、コントロールする。不都合な条件を皆で守り合った、その条件のなかである営みをし、ある目的を達する。

■社会性が育たない



幼児期の終わりごろの子どもにとっては、自分たちがつくり出した特別な虚構場面、想像の場面で、みんなで決め合った特別のルールをしっかりと守りあって、一定の目的を達するということが非常に大きな喜びになるんですね。これは学童期になりますと、さらにいっそう、そういうことがはっきりしてまいります。幼児期の前半では、ルールを守ってある目的を達成するということには、まだ普通は至らないわけですが、学童期になると、普通は、これが最大の満足ということになってくるんですね。こういう遊びの体験、社会化、あるいは社会的人格を形成するための元になっているということをお感じになりませんか。

私たちが今日会う子どもたちは、圧倒的に社会性が獲得されていない子どもたちです。不登校、登校拒否、家庭内暴力、拒食症、自殺願望、というような子どもたちを並べてみますと、社会からだんだん退却してくる様子をご覧いただけるでしょう。学校へ行かなくなる、家庭の中で苛立って親に向かって暴力を振るう。相手に暴力を振るったり、攻撃性を周囲に向けているうちはまだ精神医学的にいいますと軽症でございまして、攻撃的な感情が自分に向かう、いわゆる自傷行動になりますと、これは重症になってきます。典型的なのは拒食、過食、シンナーなどの薬物を乱用する。自分に攻撃性を向けてくる、つまり自傷行動になってくるわけです。

自傷行動の最悪のものは自殺でございしますが、何度も自殺を試みるという子どもがいます。何度も自殺を試みるというのは、非常に奇妙な行為で

ございます。何度も禁煙をしたという人がおりますね。同じようなものかもしれません。「禁煙なんか簡単だ、僕は何回もやってみた」という笑い話があるそうなのですが、何度も自殺をする、未遂に終わるということですね。そういう激しい自傷行動をする。だんだん社会から退却してくるわけです。私たちはそういう子どもたちを社会的な不適応行動、あるいは行動傷害の子どもたち、こんなふうには表面的には呼びます。

一方、暴走をしたり、グループでシンナーなどの薬物を乱用したり、万引き、その他の非行行動をしたり、性的な逸脱行動を繰り返したりという若者たち、仮に反社会的というふうに分類されたりしますが、こういう子どもがいる家庭も多くなってきました。

こういう両方の子ども、非社会群、反社会群とって分類したりしますが、厳密にはパーソナリティーの基盤に違いがあるようにも見えますが、共通する部分がむしろたくさんあります。要するに社会的人格がきちんと形成されていないんです。社会性が育っていないわけです。

行動特徴として多いのは、登校拒否、不登校といわれる子どもたちです。これらの子どもの圧倒的多数は、授業中よりは休み時間が辛いといえます。私たちの子どものころを考えると想像できないですね。われわれは休み時間が楽しいから学校へ行っていたようなもので、休み時間を最大の楽しみにしていたんです。ですから授業の始まる前の1時間も2時間も前に学校へ行っていたんです。私は、滋賀の農村育ちでございますが、農家の朝はたいへん早く、学校が始まる1時間も2時間も前に学校へ行っていたということがしばしばありました。大勢の仲間が集まってくるので、運動場を利用して楽しいあそびができたわけです。それを楽しみに学校へ行ったようなわけです。

ところが不登校の子どもに会って聞いてみますと、第1時間目の始まるまでの「あの空白の時間」、こんな表現をしますが、耐え難い苦痛だそうです。授業が始まってしまうと多少和らぐ。ところがお昼休みなどの休み時間がまた辛いんですね。

休み時間が辛いなどということは、ちょっと一般の人には想像できないでしょうけれども、彼らの苦痛はたいへんなものです。ですから、不登校の子どもは、夏休みには勉強の遅れを取り戻すなどという気持ちで、学習塾など短期集中講座などにはよく勉強に行きます。勉強が辛いのではなく、

周囲にいる仲間と深いコミュニケーションをすることがうまくいかなくて苦しんでいるわけですから、学習塾にはそれほど苦痛を感じることなく行くんですね。だれとも親しくなる必要がないわけです。先ほどの話の山田先生がおっしゃいました、触れあい恐怖症という言葉を思い出していただと、この辺の事情がおわかりと思います。

■友達と熱中体験

こういう子どもたちに会っていて私はしみじみ思うのですが、子どもというのは、仲間とやむにやまれない強い衝動をもって、ある架空の世界をつかって一定のルールを設けて、何事かに没頭し熱中して、一定の目的を達することに深い感動を覚える。子どもころのこういう体験を抜きには、健全な社会人にはなれないように思います。あるいは社会的な人格をしっかり形成してゆくことは無理だというふうに思います。友達と強い衝動をもって、何かに熱中や没頭するという体験がなくては、私たち人間はほかの人に共感的な感情を抱くことができないのではないか、社会性や社会的な人格というのは、そういう体験を通して育てられるのではないかと思うのです。

私は、知識や技術というようなものはいくら十分に身につけても、それは人格には直接結び付かないのだということを、子どもや若者たちに会って嫌というほど思い知らされました。

勉強ができる、それからスイミングスクールやサッカークラブや野球クラブでコーチ・監督に指導される意味でのスポーツができる、こういう子どもはたくさんいます。今日のスポーツはほとんどそういうスポーツです。原っぱや空き地で、三角ベースをしたりサッカーをしたりというような、自由に仲間が集まってやるということではないわけです。子どもたちにスポーツをとと思えば、近所のサッカークラブや野球クラブに入れてあげなくてはならないわけです。そうしますと、これは監督やコーチに指導されるんです。

監督やコーチの指導というのは、今日ではまるで職業野球のような指導のしかたをしています。そうしなければ勝てないのです。私の3人の男の子どもたちは、上と下の子が野球クラブに、真ん中の子どもはサッカーか

ら野球のクラブに入りました。街の中の野球クラブでございますが、その指導のしかたやスタイルは職業野球と同じでありまして、監督、コーチの方が手取り足取り非常にこまごまと教えるんですね。試合になりますと、打席に立った打者は、次にボールを打つべきか打ってはいけないか、いちいち監督やコーチの采配を受けるんです。1球1球自軍のベンチを振り返るんですね。どんなに打ちたい誘惑にかられた球が来たって、待てというサインがでたらバットを振ってはいけない。下手に振ろうものなら控えの選手と替えられてしまいます。塁に出ますと、次には、走るべきか走ってはいけないかも指示を受けなくてはならない。走れといわれたら、どんなに足に自信がなくても走らなくてはいけないし、どんなに走るチャンスだと思ってもまだ走るなといわれたら、走ってはいけない。これは職業野球です。こういうスポーツのやり方なんですね。少なくとも自由にスポーツを楽しむことはできないのです。



■スポーツやチームワークの中味

いつか私は、子どもの野球の試合を見に行き行って驚いたことがありました。相手のチームが試合前の打撃練習をしておりました。小学校4年生ぐらいのときですが、バッティングの練習をしていたある子どもが、たまたま2、3回うまく打てずに空振りをしてしまいました。そうしましたら、遠くのほうにいた仲間の少年が、「こうやってみろ、こういうところがおかしいよ」とちょっとした助言をしたんです。そうしましたら、そのチームの監督さんだかコーチの方が、その助言をした少年のほうを振り返って、「おまえはいつからコーチになったんだ」と、たいへんなけんまくで叱っていました。私は、その少年の助言が正しいのか正しくないのかは知りません。もし間違っていれば、「そうじゃないよ」と軽く注意すればいいと私は思うのですが、「おまえはいつからコーチになったんだ」と、こういう雰囲気

気なんですね。これが少年野球なんです。

泳ぎを練習しようとしても、そこら辺にきれいな川や湖がありませんから、泳げません。しかたがないからスイミングスクールに行く。わが家の息子も3人ともスイミングスクールに行きました。コーチから水泳を習うわけです。あるとき、たまたま息子の泳いでいるのを見に行きました。立派な施設のスイミングスクールでありまして、親はガラス張りのこちらのロビーから見ているわけです。そうしますと、息子のグループの仲間の一人が、プールサイドに立たされているのです。最初、気分でも悪いのかと思いましたら、そういう様子ではない。後から聞いてみますと、「何君は3回おしゃべりをしたから」だということです。2回まではいいのかどうかは知りませんが、コーチのいうことを聞かないでおしゃべりしていたら、3回目には立たされたということです。親御さんは月謝を払っているんでしょくに、習わしてもらえない。

それはともかく、手取り足取りの指導ですから、確かに技術は上達はします。少年野球や少年サッカーを見ていて、私はしみじみ思います。彼らはチームプレーはやっていますが、あれは技術のチームプレーでございまして、決して心の連係なんかではない、心からのチームプレーではないと思います。監督やコーチは「声を出せ、声を出せ」と試合中、盛んに少年たちに声をかけています。子どもはいわれるとしょうがなく、「オー」とか何とかいっていますが、なかなか生き生きと声が出ない。それはそうです。あれだけ金縛りになったら、生き生き伸び伸び声を出してスポーツはできません。

こういうことについて、私はあるとき、ちょっとコーチや監督さんにお話ししましたら、佐々木さんのようなことをいっていたら、1回も勝てませんよ、といわれました。そうなのかもしれません。今日の少年のスポーツでは、思いっきり好きなように打ってこい、なんていっていたら、全然勝てないんでございましょう。

少年野球にも、プロ野球と同じ納会というのがあるんですね。その日は親が動員されまして、グラウンドで焚き火をして、お餅をついたりお汁粉をつくったりなんかするんです。そして1年のおしまいがあってシーズン・オフを迎えるわけです。そういうときには、子どもたちは、野球の練習はもちろんしません。お餅がつけたりするまでの間、サッカーをやった

りドッジボールをしたりしていますが、そうすると、生き生きといい声が出るんですね。ほんとうに、伸び伸び生き生きと声が出ます。「そら、そのボールをこっちに回せ、ああしろ、こうしろ」と、実にワイワイみんながいい合って楽しんでいるんです。

そういう様子を見て、あるとき監督さんが「お前たち、その声を野球の試合で出せ」といったことがあるんです。出るはずがありません。これは無理です。「負けてもいいから自由にやってこい」といえば出るでしょうが、「こっちへボールを投げろ、次はどこへ打て」とか、どうのこうのといっていたんでは、とても伸び伸びとはいきません。

現在は、こういう状態でスポーツをしているんです。こういうスポーツがそんなに精神衛生によいはずがございません。中央線の沿線のK市やN市といえば、サッカーが非常に盛んな街でございますが、その少年サッカーのエースストライカーといわれる家庭内暴力の少年に、あるとき私は、東京女子医大病院の小児科で続けざまに3人に会いました。驚きましたね。スポーツ少年が親に対して家庭内暴力です。エースストライカーなどと呼ばれる少年が家庭内暴力を起したら、これはたまったものではございません。お母さんは3人とも実家に帰ってしまったということです。息子と生活できないんですね。エースストライカーといわれるたいへんなキック力をもっている少年ですから、1回けっ飛ばされたらどうなるか。チームの大黒柱のエリート少年のはずですよ。そういう少年たちが、およそスポーツ少年とは思えないでしょう。スポーツというのは今日、いったい子どもたちに何を教えているか、ということです。

子どもたちはスポーツをほんとうに生き生き伸び伸びと、仲間と共感しあって楽しんでいるのではないのです。スポーツマンシップやほんとうのチームワークという人間社会のルールのようなものを学ぶ場ではなくなっているのです、子どもが自分たちでつくりあげた虚構の世界で、自分たちがつくり上げたルールを守って、役割を分担し合いながら、スポーツやあそびを楽しんでいるのではないのです。現代の子どもたちの世界はそういうことなんです。

■休み時間と伝え合い

ですから、クラスでいちばん勉強のできる秀才の登校拒否というのがあるわけです。休み時間や放課後を思いきり楽しめる登校拒否というのは絶対にございませぬ。私は、学校が楽しいか楽しくないかは、勉強ができるかできないかで決まるのではなくて、休み時間が楽しいか楽しくないかで決まるんだということを、20年ほど前に気づきました。もちろん、休み時間が楽しく、その上で勉強がよくできれば、こんなにすばらしいことはありません。休み時間だけ楽しめる子どもは、授業中はわりあい苦しんでいるのですから、次の休み時間をじっと堪えて待っているわけです。こういう記憶は多少皆さんにもございませう。あと10分、あと5分、ということはあると思うんですね。そして休み時間が来てホッとすると、ところが、われわれのところに来る登校拒否といわれる子どもたちは逆なんですね。授業中のほうがいいというのです。

高校生の場合、まだ登校拒否を始めて最初のうちは試験のときだけは学校に行きます。ちょっと考えられませぬね。普段休んでいるのに、試験のときだけ登校する。それは確かに留年をするとか成績が落ちるということに対するある種のこだわりがありませうけれども、試験のときに行けるのは、そのときは、いわば大きな受験塾の雰囲気ですから、仲間と生き生き伸び伸びコミュニケーションする必要がないからです。

ですから、子どもたちが勉強がよくできれば、あるいはスポーツができれば、それだけで社会的な人格が形成される、ということではないんですね。知識や技術は、そのものだけでは決して人格には直接結び付かないということをお知りにならなくてははいけません。

こういうことを考えてきますと、アイデンティティーとかモラトリアムなどという言葉でたいへん著名な発達心理学者・精神分析家のエリクソンという人の言葉が思い出されます。ちょうど私たちの文化に置き換えますと、公的な教育が始まって最初の数年間、すなわち小学校時代といってもいいかもしれませんが、その子どもたちが社会的な人格を形成していくために、絶対的に必要なエッセンシャルな発達条件、エリクソンはクライシス(危機)という言葉で呼んでいますが、われわれの言葉に置き換えれば、発達課題といつてもいいかもしれませんが、小学校時代に絶対的に必要な要件

は何かといいますと、友だちから多くのものを学ぶこと、そして友だちにものを伝えたり与えたりすることだ、ということを行っています。「道具や知識や体験の世界を仲間と共有し合うことだ」と、こういう言葉で表現しておりますが、友からものを学び、友にものを教えることだと、できることなら、年上の、経験豊かな子どもからものを学び、年下の経験の不足している子どもに何かを伝えていくという、こういう生活様態をとることだ、というのです。

だいたいこれは、本来はあそびのなかで達成されることでしょう。これを抜きにして、古今東西を通じて地球上のありとあらゆるところに住む子どもたちのなかに、こういう体験を抜きにして、その社会に通用する健全な人格を、社会的人格を形成することは、恐らく不可能ではないか、ということを行っています。これも見事な洞察ですね。子どもは、小学校時代に友達から多くのものを学び、友達に多くのものを伝えるという経験なしには豊かな社会的人格を育てることはできない。

先ほどからお話ししている勉強やスポーツ、現代っ子ですから、そのほかにお稽古事、ピアノとかお習字とかいろいろやっています。それ一つづつはみんな価値の高いことだと私は思います。そういうことを習うことは、それは素晴らしいことです。けれども、これらは全部大人からしか学んでいないわけです。大人からしかものを学ばない子どもでは、社会的な人格を形成するための必要な発達課題を消化しているとはいえないんだということを、エリクソンは、見事に、いろいろな言葉を使って証言しているんですね。子どもは友からも学ばなければいけない、友達にものを教えなければいけない。

これは、皆さん、先ほどお話ししましたように、あそびの世界でいちばん達成されやすいことでしょう。私は、友達と共通の目標をもって、一定のルールを守り合って、ある目的を達成して感動するという、こういう経験というのは、非常に大事なことだと思います。しかもそれが、やむにやまれない衝動をもってということになると、やっていることは大抵大人の目から見ると立派なことには見えません。くだらないことにしか、子どもはそんなに熱中できないですよ。一見くだらないことに見えること、あそび、いたずらなどですが、けれども、それは子どもたちが成熟していくために絶対的に必要な主導的な生活スタイルであって、単に、優位を占める

子どもの生き方ではないんですね。楽しいから、単純に好きだから、面白いからやっているというものではないんだということが、ご理解いただけるのではないかと思います。子どもにとってあそびというのは、私は正に、社会的な人格を将来形成するために、絶対に必要な生活様態だろうと思います。そういうことを抜かしたままでは、非社会的な状態に陥らざるをえないか、あるいは、反社会的行動に走らざるをえない状態になっていくように思います。



■暴走する若者たち

私たちから見てみますと、暴走族は、暴走することが目的ではないように思います。暴走という行為を媒介に、何か仲間と共感する行動を一生懸命に探しているようですね。ですから、一人で暴走している暴走族というのはいません。モーターバイクを一人ですつ飛ばしている暴走族の若者を、皆さん見たことはないでしょう。あれは、暴走することが目的ではなくて、スピードというものを媒介にして仲間意識や共感的な感情を味わっているんです。

私は、過去に登校拒否があったり、シンナーをやったり、性的脱線行動があったりという若者たちにいろいろ相談に乗る機会があるんですが、例えば、ディスコクラブに行く子どもたちに、「ディスコって面白い？」と聞きますと、「楽しい。けれども、はねたあとがとても辛いんだよね」といういい方をします。「踊っているときは気分が生き生き安らいているのだ。けれども、終わったときの、あの寂しさは堪えられない。先生、わからないでしょう」といいます。おそらく野球ファンクラブの人が、試合が終わった後、みんながうちに帰るときにも、それに似たような経験をするのだらうと思うんです。

何年か前に、阪神タイガースが優勝した年がありました。全国的に阪神ファンがフィーバーした年でございまして、ちょうどその年、私は、神奈川県庁である会議があつて、雨の中を夕方帰ってきたんです。その日たまたま阪神タイガースと横浜大洋ホエールズの試合のある日だったんです

が、雨で中止になったのです。ところが阪神ファンの人たちがどしゃ降り
の雨の中を帰らないで、球場の前で大勢たむろして、旗を振って、「六甲
下ろし」の歌などを歌っているんです。球場関係の人がマイクで、「早く
お帰りください、本日の試合は中止になりました、早くご解散ください、
球場前を通行する人の妨げになるので、どうか早くお帰りください」と一
生懸命に拡声器で放送しているんですが、あの人たちは帰らない。寂しく
て帰れないのかもしれない。

ああいうことでしか、なかなか共感できにくくなっているのでしょうか。
現代の孤独な人の集まりのように私には見えませんでした。ほんとうかどうか、
一人ずつ聞いてみないとわかりませんが、私は、「ディスコのはねたあと
が辛いんだよね、先生」といった子どもの気持ちと同じように思えました。
だから、つい無理やりにだれかを誘って深夜喫茶なんかにしけこんじゃう
とか、ホテルに行きたくなるんだとかいいます。要するに、人恋しいんで
す。人恋しいんですけれども、普通に人とコミュニケーションするために
必要な感性や情緒が十分育っていないわけです。ですから、ディスコへ行
く、暴走をやる。どれも、ビートの聞いた激しい音楽があるとか、サイケ
デリックな照明があるとか、超豪華なシャンデリアがあるとか、スピード
があるとか、セックスがあるとか、薬物があるとか、というように、強い
刺激を媒体にして、人とコミュニケーションがもてるような状態です。

幼年期から少年期にかけて、仲間と一緒にあそびが十分にできなかった
子どもたちとは思いませんか。そんなことをしなければ、仲間と共感し、
コミュニケーションができない。人と共感する感情や人格が成熟していな
いんです。感性が育っていないのです。こういう状態をいまの若者たちに
見るんですね。ですから、暴走族の若者だって、仲間とロックのバンドと
かグループサウンズなんかを結成すれば、それで暴走はやめるんです。例
えば、横浜銀蝋という若者がそうです。暴走行為がいいと思ってやってい
るのではないんです。やむにやまれな
くてやっているのです。



■ボーダーライン人格

ボーダーラインと呼ばれるパーソナリティー障害の人がいます。一言で申しますと、怒りの感情のコントロールができない、相手の立場になってものを考える感性が育っていない、些細なストレスで混乱して自傷的な行動に走りがちになる。このような若者がいます。先ほどのあそびで申しましたが、あそびというのは、ルールを守り役割を担い合って一定の目的を達することにその真髄があります。ルールを守り合うということは、直接的な生の感情をコントロールすること、自分の最も直接的な生のままの衝動や欲求をコントロールしながら、みんなが価値を了解し合っていることを達成する。子どもは順調に成熟すれば、幼年期の終わりごろには、このことに最大の満足感を感じるようになるんですね。これはあそびの中、虚構の世界でまずやるわけです。ほんとうは、社会の中で、やがてやるようになるわけです。自分の生の衝動を抑制する、モーターバイクで信号を無視して走らない、ウォークマンで騒音を車内にまき散らさない、人の物を盗まない、性の衝動をコントロールする。こういうことは、本来、あそびのなかで学んでおかなくてはならないことです。あそびのなかで自然に身についてくるべきはずのことです。ところが現代っ子は、そういうあそびの時間がないわけですし、空き地で自由にサッカーや三角ベースや陣取りや缶蹴りなど、われわれが子どものころにやったように、めんこや、ベゴま回しなどもできない。

現代っ子はそれではどういふことをやればいいのか、皆さん、ぜひお考えいただかなくてはいけないことです。あそびというのは、暇つぶしではないのです。勉強を逃げるためにやっているのではないのです。仕事や家の手伝いがいやだからやっていることではないのです。子どものあそびというのは、大人のストレス解消とはまったくわけが違います。つまり、発達・成熟・人格形成ということに対して、不可欠の要件、ということがおわかりいただけると思うんです。

そういうふうな、子どもたちに、いろいろな人との豊かな人間関係のなかで、そういうことが達成されていけるように、子どもの周辺にいる大人、私たち自身が、日ごろ豊かな人間関係をもち合いながら子どもを育てていかなければ、子どもたちが自然にそういうふうにはなっていない、とい

うふうに私は思っています。その理由は、いちばん初めに申し上げたとおりでございます。シンポジウムのための問題提起になりましたでしょうか。ご静聴、ありがとうございました。(拍手)

佐々木 正美先生



子育て楽会顧問 川崎医療福祉大学教授
横浜市総合リハビリテーションセンター参与
ノースカロライナ大学臨床教授 精神科医

主著：

「エリクソンとの散歩」子育て協会
「子育ての本」子育て協会
「子どもへのまなざし」福音館書店
「育てたように子は育つ」小学館
「自閉症療育ハンドブック」学習研究社
他に多数の著作あり

※ この講演は、佐々木正美先生が(財)小児療育相談センター所長であった1989年頃のものです。

Copyright Masami Sasaki 許可無く無断複製と配布を禁止します。

B5用紙にページ設定されています

「MIND -子どもの心を育てるために」

<http://mindsun.net>